

求安錄 上の部

悲 嘆

人は罪を犯すべからざるものにして、罪を犯すものなり、彼は清淨たるべき義務と力とを有しながら清淨ならざるものなり、彼は天使となり得るの資格を供へながら屢々禽獸と迄下落するものなり、登ては天上の人となり得べく、降つては地極の餓鬼たるべし、無限の榮光、無限の墮落、共に彼の達し得る境遇にして、彼は彼の棲息する地球と同じく絶頂 Zenith 絶下 Nadir 兩極點の中間に存在するものなり。

降るは易くして登るは難く、降れば良心の責むるあり、登るに肉慾の妨ぐるあり、我が願ふ所のもの我これを行さず、我が惡む所のもの我これを行し、我は二個の我より成立するものにして、一個の我は他の我と常に戦ひつゝあるものなり、誠に實に此一生は戦争の一世なり。

セネカ曾て親友ルシラスに書き送て曰く、

Vivere, mi Lucili, militare est.

(我がルシラスよ我に取りては生るは戦ふなり)

と、人生を以て快樂と言ふものは誰ぞ、我に一日の虚日あるなし、關ヶ原ウォーターlooは日々我わが心中に目撃する處なり。

曾て聞く、ジヨン バンヤンは屢々犬猫の境遇を羨みて止まざりき、そは犬猫は人の戦ふべき戦を有せざればなりと、人各々不満あり、彼は思へらく、我に富あらしめば我足らんと、^{「じこう」}而して富彼に來りて彼尙ほ平安を得ず、我に善良なる妻ありせば我足らんと、彼に幸福なる家族あるありて彼尙ほ足らず、人は内部の^{けつぱう}缺乏を認めずして之を外部に認め、内を満たさんとせずして外に得んとす、我の敵は我なる事を知らずして、内に存する苦痛は外に漏らさんとす、爾曹^{なんぢら}の中の戦鬪と争競^{あらそひ}は何より來りしや、爾曹の百體の中に戦ふ所の慾より來りしに非ずや（雅各書第四章一節）、然り世の始めより今に到る迄^{すべ}渾ての戦、渾ての争の原因を究め見よ、皆悉く慾の戦争にして、自己の不満を他人の上に洩せしものなり。

博士ムンゲル氏言へるあり。

“ The unrest of this weary world is its unvoiced cry after God.” — Munger.

人世の不満は神を求むる無言の聲なり、

我等神を得て始めて安し、世は最大幸福を求めつゝありて未だその最大幸福なるものは何たるを知らず、我等をして再びウエスレーの言を重複せしめよ、

何よりもよき事は神我等と共に在す事なり。

人は罪を犯してはならないものであるが、罪を犯すものである。彼は清らかであるべき義務と力を持っているが、清らかではないものである。彼は天使になり得る資格を備えているが、しばしばたちまちにして禽獣にまで下落するものである。登っては天上の人となることができ、降っては地の底の餓鬼となることもあり得る。無限の栄光と、無限の墮落は、共に彼が達し得る境遇であり、彼は、彼が住んでいる地球と同じく、絶頂 (Zenith) と絶下 (Nadir) という両極点の中間に存在しているのである。

降るのは容易であるが、上るのは難しく、降れば良心が責めることがあり、上るには肉欲が邪魔をすることがある。私が望むことを私は実行せず、私が嫌うことを私は実行する。私は二つの「我」から成り立っているものであり、一つの「我」はもう一つの「我」と常に戦い続けているのである。まことに、実に、この一生は戦争の一生である。

セネカはかつて親友ルキリウスに書き送って、「Vivere, mi Lucili, militare est. (我がルキリウスよ、私にとつては生きることとは戦うことである)」と言っている。人生を快樂だと言う者は誰であろうか。私には一日の虚しい日はない。関ヶ原やワートルローの戦いは、日々私が自分の心の中で目撃するところである。

かつて、ジョン・バンヤンはしばしば犬や猫の境遇をうらやんでやまなかったと聞く。それは、犬や猫は人が戦うべき戦いを持っていないからである、という。人はそれぞれ不満を持っている。彼は「私に富があれば、私

は満足するだろう」と考える。しかし、富が彼のところにやって来ても、彼はなお平安を得ることがない。「私に善良な妻がいれば、私は満足するだろう」と考える。彼に幸福な家族があるというのに、彼はなお満足しない。人は内部の欠乏を認めず、それを外部に認め、内を満たそうとせず外に得ようとする。自分の敵が自分自身であることを知らず、内に存在する苦痛を外に漏らそうとするのである。「あなたがたの中にある戦闘や争いは何から生じているのか。あなたがたの体の中に戦っている欲望から生じたのではないのか」(ヤコブの手紙四章一節)とある。然り、世の初めから今に至るまで、すべての戦い、すべての争いの原因を究明してみると、すべてが欲望の戦争であり、自己の不満を他人の上に漏らしたものである。

ムンガー博士は、「The unrest of this weary world is its unvoiced cry after God,」(この疲れた世界における不安は、神を求める無言の声である)と言っている。人生の不満は神を求める無言の声である。

私たちは神を得て初めて平安である。世は最大幸福を求め続けているが、いまだその最大幸福とは何たるかを知らない。私たちに再びウェスレーの言葉を繰り返させてもらおう。

何よりも良いことは、神が私たちと共に居られることである。